

「底が突き抜けた」時代の歩き方 316

ゴドーを待ちながら、^{サバイバル・ガイド}『サラエボ旅行案内』を手に！

戦火のサラエボでサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』が、作家・思想家のスーザン・ソントグの演出で上演されたことが折に触れて思い起こされてくる。映画『ノー・マンズ・ランド』を見た後、映画パンフをめくっていると、ダニス・タノヴィッチ監督がボスニア紛争について、「同じ言葉を話す市民同士が戦うということは、この紛争の当事者にとって、どのような意味を持ちましたか？」と尋ねられて、こう答えているのが目に飛び込んできた。

「この事実は、戦争をさらに愚かなものにしました。それは、サミュエル・ベケットの作品に見られる愚かさと同じものです。登場人物たちは、意志の疎通ができないのです。ボスニア人の身に起こったこの紛争は、ベケットの戯曲の表題に要約できるような気がします。『ゴドーを待ちながら』 - 我々は本当にゴドーを待っていました。紛争の間、待つのをやめたことは一瞬たりともありませんでした。そして、やっと彼が来てくれたと思ったとき、僕らの希望は幻想にすぎず、結局誰も来ないのだと知ったのです……国連の介入は、彼ら自身の面目を保つためであり、我々を救うためではありませんでした。」

そういえば、^{サバイバル・ガイド}『サラエボ旅行案内』を企画したグループ「FAMA」の代表スアダ・カピッチが来日した際に、浅田彰と対談（『SAPIO』95・1・26 - 2・9）を行っている。

カピッチ 私たちは、共産主義体制下で、対抗文化として、ハリウッド映画に夢中でしたから、アメリカのカウボーイが私たちを守ってくれないことにショックを受けました（笑）。

浅田 ソントグも、サラエボでサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』のリハーサルをしながら、「クリントンを待ちながら」という洒落を言ったものだ、と言っていますね。もちろん、ゴドーと同じく、クリントンもいつまでたっても来ない。

カピッチ そういうわけで、サラエボをめぐる政治的ゲームはひどく込み入っており、へたな希望はもてません。その中で、長期にわたって、さまざまな紛争が続くでしょう。そして、最終幕はサラエボで戦われることになるでしょう。その時は、いくつかの強国

が領土を分割し、現在、サラエボで私たちとセルビア人勢力の占領地区とを分かち小さな川が、アメリカ軍とロシア軍の境界線になるといったことも、ありえないではないと思います。あまり楽しい未来とは思えませんが、しかし、そういう安定を手に入れるためにすら、10年も待たなければならないかもしれないのです。

この対談でカピッチはまた、「未来の希望」のない状況下での生きかたについてもこう語っている。

「私たちはもはや希望をもっていないと言いましたが、それは幻想をもっていないということです。だれかが助けてくれるだろうというような希望をもっているかぎり、自立型のモデルによるサバイバルを目指すことはできません。もはや私たちは希望をもっていない。そして、私たちはかつてなく強いサバイバルの意思をもって、積極的に活動しているのです。

戦争前、人々は喜んでオフィスに通っていたわけではありませんでした。それが今では、人々は必ずオフィスにでかけます - 仕事なんか、ほとんどないのですが（笑）。人々は、朝おきるときちゃんと服を着て出勤し、電気の消えた凍てつくようなオフィスでおしゃべりをして過ごすのです — 窓にはガラスもなく、いつ弾が飛んでくるかわからないのに。これは無駄なことではありません。家でたったひとり暇な時間を持て余していると、つくよくよと考えて、希望と幻滅の連続で精神をすり減らしてしまうのです。

そこで重要なのは、ユーモアです。それは、悲惨な現実の中にいながら、そこから距離を取ることを可能にしてくれるからです。『サラエボ旅行案内』^{サバイバル・ガイド}のことでCNNに出たとき、どうしてこんな悲劇について冗談を言えるのか、と聞かれました。それで私は言ったのですが、地獄のまっただなかにおいて、未来の希望もなく、葬式と結婚式を同時にやらなければならないとしたら、冗談を言う以外に何ができるでしょう。私に言わせれば、冗談を言うことは、正常なサバイバルの手段なのです。」

「参考までに、私の一日を紹介してみましょう。朝おきると、私はまずネズミを殺さなければなりません（笑）。なかなかいいアパートなのですが、ネズミも同居しているのです。それから4kmの道を歩いてオフィスに行きます。交通機関はありません。私たちのオフィスは、特別に電気を供給され、通信衛星のリンクで外ともつながっていますから、電話やファックスやEメール（コンピュータ通信）で各国と連絡を取り合いながら、文化交流のアレンジをします。日本とも、ピッツバーグのステーションを経由して、ファックスのやりとりをすることができるのです。一日の終わりにはビデオ・ゲームで遊びますが、これはリラックスするのにとても役立ちます（笑）。家路につく頃には、外は真っ暗闇です。もちろん街灯などというものはありません。家に帰っても、やはり真

っ暗です。両親が第2次世界大戦のときからとっておいてくれたガス灯が唯一の頼りです。その明かりの下で、文字通りささやかな夕食をとり、ラジオを聞き、そして8時頃にはもうベッドに入ります。何も無いところでは、そうするほかないのです。この冬を越せるかどうかはまだわかりませんが、とにかく今までのところは、こんな生活でなんとか生き延びてきました。」

もちろん、そのような「**未来と幻滅の連続で精神をすり減ら**」す状況に直面して、カピッチたちは「冗談」ばかり言っていたわけではない。その場しのぎの「冗談」は元気づけるどころか、気を滅入らせるだけだからだ。カピッチたちの「冗談」は、自分たちがいま世界史の中のどのような場所に立たされているのか、を正確に見通そうとする俯瞰的なまなざしを獲得しているところからもたらされる。ああ、私たちはこんなところで躓いて絶望しているよ、おかしいね、と笑い飛ばす想像力で構築された世界にも軸足を置いて生き延びようとする精神的なゆとりが、命がけの「冗談」を連発させるのだ。では、彼らは自分たちの発する「冗談」の中にどのような世界の見取り図を覗き込んでいるのか。「そういう絶望的な状況にしながら、しかも、それを未来のための実験場と考えようというわけですね。」という浅田彰に、カピッチはこう答える。

「ええ。サラエボはいわば多層的な時間を生きています。第2次世界大戦直後の廃墟の時間、共産主義体制の痕跡の時間、そして、スパイ衛星が私たちを監視し、私たちも通信衛星を通じて外と連絡するという、未来の時間。そこでは未来からのメッセージを受け取ることもできるのです。」

実際、この世紀末に立って見回してみたとき、いままでの文明国での生活様式を、これから地球に生きるすべての人間が享受できるかどうかは、大いに疑問です。私たちは、必要に迫られて、インフラストラクチャーに依存しない自立型のモデル、ハードウェアよりもソフトウェアに重点を置くモデルを考えてきましたし、これからもその探求を続けるでしょう。その結果は、21世紀の人類に役立つかもしれないのです。」

カピッチの予測通りに、世界の各国は確かに「インフラストラクチャーに依存しない自立型のモデル、ハードウェアよりもソフトウェアに重点を置くモデルを考え」る方向に進みつつあるが、自分たちがいま身をもって「多層的な時間」を掻い潜りつつあるという、カピッチがつくりだしている経験こそが未来につながる「希望」に思えてくる。非常に逆説的であるが、絶望のどん底で拾ってくる小石を宙空に放り投げて描かれていく軌跡に、「未来の時間」を覗き込んでいるのだ。絶望がなければ希望もない。絶望の淵に立たされたときこそ、人は希望を求めようとする。ただ希望が絶望と同様に虚しいのは、募ってくる絶望の反対方向に希望を見出そうとするからだ。そこでの希望は絶望の裏返しにすぎない。本当の希望は絶望のその状態にこそ奥深く潜んでいる。手っ取り

早くいえば、絶望に落ち込む状態こそが希望を手にする状態にほかならない。希望という名の絶望に身を挟むのではなく、絶望という名の希望に直面していることがみえてくるように、絶望の底から掴み取ってくるすべてのものが希望の小石に変えられなければならないのだ。

カピッチは絶望的な状況から逃げだすことを考えずに、絶望のどん底に深く降り立とうとする。それは絶望的な状況から誰も逃げだせないことがわかっているからだけでなく、この絶望のどん底から未来につながる途を見つけださない限り、自分たちは永遠に袋小路に閉じ込められたままであることを確信しているからだ。「冗談」をいいあいながら、カピッチは絶望のどん底で自分たちのいま味わっている絶望を、自分がこれまでに生きてきた時間がかかえこんできた絶望の量に置き換えて計量するだけでなく、これから自分が生きていく未知の時間にも差し込んでくる絶望の量としても計量しようとしていることが窺える。そこでの「未来からのメッセージ」は、「未来の廃墟」に思われて仕方がない。サラエボは「過去の廃墟」に巡り合っているだけでなく、「未来の廃墟」にも深く包み込まれているのだ。

「ウクライナ出身のカメラマンが、『サラエボ^{サバイバル・ガイド}旅行案内』をみて、次はウクライナのためのサバイバル・ガイドを用意してほしい、と言うんです。そのうちウクライナの番だから、と。でも、私はむしろニューヨークなんかのほうがサバイバル・ガイドを必要としているんじゃないかと思うんですよ。アメリカ人はわたしたちの本をみてブラック・ユーモアだと思うらしい。それどころか、この本は、かれらにとっても潜在的にリアルな問題を扱っているんです。」とカピッチがいうとき、ちょうど10カ月前に9・11の同時中枢テロがニューヨークを中心に勃発したことを考えると、「私はむしろニューヨークなんかのほうがサバイバル・ガイドを必要としている」のではないかという彼女の発言が、恐るべき洞察力を潜ませていたことに改めて驚かされる。「アメリカ人はわたしたちの本をみてブラック・ユーモアだと思」ったとすれば、94年発行の『サラエボ^{サバイバル・ガイド}旅行案内』を見た7年後に同時中枢テロ事件が起きた現実を、アメリカ人はどんな「ブラック・ユーモア」として受けとめたのだろう。

もっとも対談が行われた94年末では、同時中枢テロ事件など想像もできなかったから、カピッチの先の言葉はあくまでも比喩的にしか受けとめられなかった。だから、浅田彰も次のようなごく一般的な感想を返す以外になかった。「その通りですね。ニューヨークの治安はひどいものだし、インフラストラクチャーもかなりガタがきている。現実には、いつ、どこに行くと、危険なことがある、という知識がないと、危ない目にあいかねませんからね。また、インフラストラクチャーに盲目的に頼りきっている東京のような都市も、別な意味で、あなたがたのサバイバル・ガイドを必要としているのかもしれない」

れません。」

浅田彰はニューヨークがサバイバル・ガイドを必要としているなら、同じハイテク都市の東京も「**あなたがたのサバイバル・ガイドを必要としている**」筈だ、という意味あい
いで応じているだけで、そこには予言的な意味あい**サバイバル・ガイド**は皆無であったにもかかわらず、カ
ピッチが浅田彰のその言葉を受けて、「その意味でも『サラエボ旅行案内』の日本語版
の表紙はとてもいいと思います。あれとそっくりの東京の地下鉄路線図を見かけたので
すが、私たちの『サラエボ旅行案内』**サバイバル・ガイド**を地下鉄のキオスクに置いていただいたらどうで
しょう。案外、役に立つときがくるかもしれないと思うのですけれど。」というとき、
俄然、彼女の言葉は予言的な色調を帯びてくるのである。対談直後の95年1月17日
に阪神・淡路大震災が起こり、その二カ月後の3月20日朝8時頃、まさに東京の地下
鉄「霞が関」駅に向かう日比谷線、丸の内線、千代田線の三路線計5台の車両内で、オ
ウム教団の実行メンバー5人によってサリンが撒かれ、乗客計12人を殺害、数十人の
重傷を含む5500人が負傷するという前代未聞の事件が発生したからである。

確かにカピッチのいうように、地下鉄サリン事件によって「『サラエボ旅行案内』を
地下鉄のキオスクに置」くと、「案外、役に立つとき」を対談の三カ月後に持ってしまった
のである。カピッチの発言は今後東京で起きるかもしれない、ニューヨークの9・
11同時中枢テロ事件に匹敵する大惨事の予言に向かうものであったかもしれないとし
ても、とにかく地下鉄サリン殺人事件によって『サラエボ旅行案内』**サバイバル・ガイド**が必要となる状況
が小規模ながら、起こったことは間違いない。もちろん、ニューヨークでのサバイバル
・ガイドにしても、東京でのサバイバル・ガイドにしても、カピッチの発言は偶然なも
のではありません。世界の矛盾はスーパーハイテクの都市でこそ噴出する、という「未
来の廃墟」が絶望のどん底に降り立つとありありと見えてくるという問題なのだ。

カピッチの発言を目にすると、サラエボでいま起きている絶望的な事態は世界に先駆
けて見舞っているだけであって、やがて自分たちが体験している「未来の希望」もない
絶望的な状況は、全世界の各地で惹き起こされる事態であることを確信しているのが感
じられる。なぜなら、ボスニア内戦は世界の無関心によって惹き起こされているからだ。
世界の無関心が集中しているサラエボに居住するカピッチたちは世界に関心を持ち続け
ているのに、世界のほうはサラエボに関心を示さず、事態を放置していたために、もは
や引き返しようのないところまで行き着いてしまったという思いを、サラエボの人々
と同様にカピッチも抱きつづけている。「さしたる資源も地政学的価値もない」(浅田彰)
バルカン半島での揉め事にはどの大国も関心を示さないという世界の構図は、利害関心
のある世界の他の地域に介入していった、無理矢理揉め事を起こすことの裏返しにほか
ならない。

カピッチたちの世界への関心が、自分たちが閉じこもらないためだけでなく、サラエボの絶望的な状況を世界の中で位置づけようとする欲求からやってくることは明らかであるが、その一端が、「スパイ衛星が私たちを監視し、私たちも通信衛星を通じて外と連絡するという、未来の時間」として顕現していることを、カピッチの次の発言は示している。「さっき言ったように、外と遮断された私たちにとって、通信衛星を通じたテレコミュニケーションは無くてはならないものです。仕事のためだけではありません。私たちはサラエボとアメリカをビデオ・ブリッジでつないでみました。この企画は今後いろいろなところと続けていくことになるでしょう。それによって、サラエボの人々は、包囲の下にあっても、外の人々と面とむかって話し合うことができるのです。」

世界の無関心に晒されているサラエボは孤立していたけれども、その孤立に外から手を差し伸べようとする少数の人々がいた。その一人がスーザン・ソntagであったが、彼女は世界は無関心であっても、自分はけっして無関心ではありえないことを包囲下のサラエボにむかって表明したのだ。93年8月に彼女の演出によるベケットの『ゴドーを待ちながら』の上演が、その表明であった。ソntagは浅田彰の対談（『S A P I O』94・10・13）で、「私はサラエボで、自分にとって有益である以上に、サラエボの人たちにとって有益なことをしようと努めてきました。サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を演出・上演したのもそのためで、サラエボの状況のなかでこの劇を舞台にかけることには特別な意味があると思ったからです。それは、現地の状況をドラマ化し、世界の注目を集めるという意味でも、有益でした。」と語っている。

サラエボの絶望的な状況下でもし上演するとすれば、それは『ゴドー』しかありえない、「ほかの劇なら世界のどこででも上演できる」というとき、ソntagは現地がちょうどどこからもやって来ないゴドーを待っている状況であったからと説明しているのだ。確かに包囲下のサラエボで『キャッツ』や『リア王』を上演してもなんの意味もないし、誰も振り向かないだろう。もちろん、銃弾などが飛び交わない平和で安全な都市での『ゴドー』の上演はありうるし、むしろ演劇空間は外の日常世界と断絶することによって作り出されていくという意味では、安全な場所での上演のほうが常道であり、戦火での上演は尋常ではないと考えられる。しかし、もともとサラエボ自体が尋常ではありえない状況下に置かれているのである。そのサラエボの尋常のなさ、ソntagは『ゴドー』でドラマ化しようとしたのだ。

ソntagの『ゴドー』の特異性は、他の演劇が上演場所には何の注意も払っていないのに対して、上演場所そのもののドラマ化という点にみられるだろう。いいかえると、通常の劇が上演される場所にはどんな問題も集中していないが故に、問題を劇の中に押し込めることができるのに対して、問題が集中しているサラエボでの劇の上演は、その

問題を劇の中に取り込まないではドラマ自体が成り立たなかったということだ。サラエボでソントグによって上演される以前の『ゴドー』は他の劇と同様に、上演場所を全く考慮しなかっただろうけれども、ソントグの『ゴドー』はそれが上演されるにふさわしい場所を見出したといえる。このことは、上演される舞台がその地域全体にまで拡大していることを意味する。

ソントグは戦火のサラエボに飛び込んで『ゴドー』を上演したようにみえるけれども、本当は戦火のサラエボを『ゴドー』を上演する舞台にしてしまったと私の目には映る。クロアチア人、セルビア人、イスラム教徒の三つの民族が何の争いもなく平和に暮らしていたサラエボを、セルビアで権力を手にしたミロシェヴィッチが戦火の渦中に巻き込んでしまったのであれば、そんなサラエボをソントグは『ゴドー』の上演舞台にしてしまったのだ。だが彼女は、「サラエボをめぐる客観情勢に何の希望も持っていませんし、もちろん自分が希望をもたらし得るとも思っていません。自分がサラエボ市民だったら何の希望も持てないでしょうから、私はそんなことを言える立場にいないのです。それでも、何ひとつ起こっていないよりは、何かが起こっているほうがましだろう。私はそんな何かをするために行くのであって、希望を与えに行くではありません。」とあくまでも控え目に語る。

しかしソントグはその控え目な口調の裏で、自分は「何かが起こる」ことをするためにサラエボに行く、ときっぱりといい切っている。そう、たたかうために戦火のサラエボに足を踏み入れるということだ。もちろん、彼女のたたかいは銃を取ることでない。戦火のサラエボが「ゴドーを待ちつづけている」状況を演出することである。命がけの舞台であった。絶望的な現実の中でも砲弾に抗して、砲弾から最も遠い方法で人間はたたかうことができる存在であることを身をもって示そうとしたのだ。上演するほうも命がけであったなら、観るほうも命がけであった。ドラマは舞台の上だけでなく、舞台の下でも進行していたからだ。ソントグは『ゴドー』の上演によって確かに戦火のサラエボに踏み入り、サラエボ市民たちは『ゴドー』の観劇に参加することによって、自分たちが普段味わっているサラエボとは別のサラエボに踏み入っていたにちがいがなかった。

『ゴドー』の上演もまた、『サラエボ旅行案内』そのものであった。

2002年7月15日記

